

あいさつ

ロケッシュ・チャンドラ
中川連一郎 訳

一 ガンジーと法華経

我が家の光となっていた法華経は、マハトマ・ガンジーのもとに届けられました。当時ガンジーは、インドの自由のために闘っていました。そして、インドの人々の自由は人類全体にとつての自由を意味するといふ、非常に断定的な声明を出しました。彼は、インドの自由のためだけに闘っていたのではなく、植民地化され抑圧されているすべての人々のために闘っていたのです。そして、彼と共に闘おうと、アジアや西洋の

多くの人々が彼のアーシユラム（修行所）を訪ねました。その当時、ワルダールのアーシユラムには、日本人の僧侶たちが滞在しており、よく法華経を唱えていました。また、カンボジアの僧侶も滞在していたので、仏教はガンジーのアーシユラムではかなり存在感があったのです。彼は、法華経とはいったい何なのか知りたいと思っていました。というのも、インドの地ではその頃まで法華経はまったく知られていなかったのです。革命以前のロシアでサンスクリット語版の法華経が出版されていましたが、それはソビエト連邦の崩壊まであ

まり知られていませんでした。

そこで、私の父（ラグウィラ博士）が法華経の複製を入手し、ガンジーに渡したのです。オックスフォード大学から出版された『東洋の神聖な書』のなかのケルン（オランダの仏教学者）による翻訳でした。ガンジーは、通読し、感動してこう言いました。「こんなに重要な意義をもつ経典を、我々はどうして失ってしまったのか」と。法華経には実在性と超越性が共に存在しています。そして法華経は、偉大な村落の池の底の慈悲深き土のなかで成育し、素晴らしく輝くのです。同様に、人間の精神も豊かさにあふれ、日々の生活のなかで輝きを増し、内なる仏性は高みへと上るのです。精神のこの勢いこそ、法華経の思想のまさに真髄なのです。それ以来我々は、この経典が表しているものを理解するために、せっせと努力しているのです。

一九五〇年代、訪印したフルシチョフ首相（当時）とブルガーニン首相（当時）は、ネルー首相に贈るために、ペトロフスキー本（十九世紀末、駐カシユガルのロシア領事ペトロフスキーが中央アジアで発見した法華経のサンスク

リット写本）のマイクロフィルムを携えてきました。その頃、私の父は国会議員でした。ネルー首相は父を呼び、「法華経写本のマイクロフィルムが届きました。これであなたは研究することができますね」と言ったそうです。当時は、ソビエト連邦からマイクロフィルムを入手することは、非常に難しかったのです。ともあれ私の父は、首相自身からチャンスを得たのでした。父はその後亡くなりましたが、大英博物館やドイツ・ミュンヘンの博物館所蔵の断片を補いながら、ペトロフスキー本のコピー版を出版することに尽力しました。それ以来、その手法は日本人の学者たちの多大な関心を集めました。

二 法華経伝播の歴史

法華経は、中央アジア諸国において非常に重要な経典でした。なぜなら、中央アジアはインドと東アジアの中間に位置するからです。中央アジア諸国では、法華経は西夏語、チベット語やモンゴル語など異なった言語に翻訳されました。皆さんも、当時さまざまな言

語に翻訳された異なったバージョンを目にすることができま

中国は特別な役割を果たしました。法華経は、最も偉大な翻訳者の一人である鳩摩羅什によって翻訳されました。二〇〇〇年に私は敦煌を訪れましたが、敦煌近くの鳩摩羅什の馬が倒れて死んだ場所に、ストウーパ（仏塔）が立っています。彼は、二キロ先の三日月湖に水を飲みに行くところでしたが、乾きのために馬が倒れて死んでしまい、湖に辿り着くことはできませんでした。それは美しいストウーパで、我々に生命のほかなさを思い起こさせます。私はその地に敬意を表しました。

私は、法華経が発見された多くの場所を訪れました。この法華経展で、皆さんは敦煌の絵画を鑑賞することができます。敦煌の莫高窟には約四百八十六の洞窟があり、洞窟群のなかでも最大級です。そして莫高窟第十七窟からは、約四万もの写本が発見されました。最古のトルコ語写本や、最古の中国語写本も発見されました。そこは中国のみならず、世界にとって最古の学

問の宝庫なのです。敦煌の洞窟はすべて壁画で覆われており、莫高窟、榆林窟、西千仏窟などがあります。これら三つの洞窟群は約千の洞窟からなっています。アジャンターには二十九の洞窟があります。これらの洞窟をつくった人々の広大さが想像できるでしょう。四世紀初頭、敦煌にはインド人教師がいました。紀元前二世紀には、敦煌は中国の軍事上の要所として非常に重要でしたが、徐々に瞑想の地ともなってきました。この法華経展では、洞窟の出土物とともに、洞窟内の法華経に関する絵画や、経典が納められていた容器の写真なども展示されています。敦煌の洞窟には、グプタ朝時代の書もあります。それは、インドと東アジアの間の生気に溢れた関係を示すものです。その書はまた、「ルックイースト政策」、すなわち、アジアが西洋よりも東洋に目を向けるという関係を創出することに貢献するでしょう。

この法華経展では、例えばラダックの修道院についても目にするでしょう。ラダックはかつてホータン王国の一部であり、ホータンは中国にとって法華経の写

本の源流でした。現在サンクトペテルブルクにあるベトロフスキー本などもまた、ホータンから到来しました。このように、ホータンは非常に重要な地であり、皇帝治下の中国と非常に緊密な関係にありました。この法華経展で修道院を目にするのは、法華経はインドから直接中国にもたらされたのではなく、ホータンを経由して伝えられたからです。このことは、鳩摩羅什の翻訳本に明確に述べられています。

そして、法華経がさまざまな表象された日本絵画も目にするでしょう。というのも、日本には絵解きという、絵画による經典の表現があるからです。その伝統は、ブツダの時代にさかのぼります。荘厳な九階建の高さをもつジェートワナ塔が、師ブツダに捧げられました。しかし、修道院生活に参加したのは、ごく少数の人々でした。そこでブツダは、修道院全体に絵画を描こうと語りました。そして修道院の全階に絵画が描かれ、次第にその絵画を鑑賞しに人々が訪れるようになります。絵画は人々の精神や心に語りかけ、そして、人々はダルマ（法）のメッセージを受け入れたので

す。そのように、ダルマのメッセージは、非凡な美をもつて伝えられました。なぜなら、ブツダは遁世僧侶であつただけでなく、もともと王子だったからです。彼が得たすべてのものは、大いなる慈悲をもつて偉大なものとして戻されました。

この法華経展は、法華経の壮大な広がりを紹介する初めての展示です。美しい色彩のなかに、このメッセージが秘められています。というのも、人間の精神に伝えられるすべてのメッセージは、美的側面をももち合わせていなければならないからです。美がなければ、アヒンサー（不殺生）の美もありません。アヒンサーは本来、人間の精神を慈悲深く知覚することです。慈悲に満ちたものはすべて、目で見える形で表現される必要があります。

法華経はさまざまな形式の写本として現存しています。さまざまな法華経の写本のなかでも、ベトロフスキー本は西暦六〜七世紀にさかのぼります。それは、鳩摩羅什による漢翻に近い時代のもですが、相違点もあります。ベトロフスキー本は、鳩摩羅什の翻訳本

より古い版であると思われます。鳩摩羅什は、カシミール人の商人とクチャの王女のあいだに生まれました。クチャの人々はクチャ語を話し、彼らはインドを起源としていました。彼らの祖先はクチャに定住していましたが、同時に中国の伝統ももっていたのです。こうして鳩摩羅什という一個人のなかには、実にグローバルな要素が存在していました。鳩摩羅什は、精神性のレベルにおいても身体性のレベルにおいても、壮大な一個の人間に人類の統合性を体現していたと、私は感じています。なぜなら、彼自身の体がインド、クチャ、中国という三つの偉大な伝統を共有しているからです。

三 むすび

法華経展がここに開催され、鑑賞できることは、非常に喜ばしいことであります。私は、次の法華経のメッセージを皆さんがもち帰ることを期待しています。「精神は蓮華の花のようなものである。あなたが蓮華の花を開くのではない。蓮華は自身で花開く」と。同様に、人間の精神も蓮華の花なのです。そして、人間の

精神は生まれながらにして神聖なものではありません。それは、仏性を有しています。仏性は、外界からなくあなたの内なる源泉から、自ら展開します。だから、あなたはあなた自身の運命の支配者なのです。

そしてこのメッセージが最も素晴らしく輝くのは、自らの手で、自らの目で、自らの言語で、自らのヴィジョンですべてを創造する日本の伝統においてなのです。なぜなら、日本人のヴィジョンは、非常に多くのものを結びつけるからです。池田大作氏は、このメッセージを再びインドにもたらして下さいました。もしガンジーが生きていれば、この法華経展に興奮し、法華経には偉大な視覚的魅力があるということを理解するでしょう。なぜなら、アジアが伝統だけでなく物質的豊かさという点においても、現代世界へと発展できることを日本が示したことに、彼は当時とても興奮していたからです。そして、その現代国家・日本には法華経が深くしみ込んでおり、文化と文明の光が輝いているのです。時折形を変えて起こる問題は、ハンチントンが提示した「文明の衝突」です。いま我々は衝突

を避け、文明と文化の共生に挑戦しています。よって法華経は、過去そして未来において、最高の事例の一つなのです。我々の時代には、言語の共有、思想の共有、そして視覚様式の共有がみられるのです。

(ロケッシュ・チャンドラ／インド文化国際アカデミー

理事長)

(訳・ながわ れんいちろう／デリー大学大学院)